

#### 42 胃癌症例における癌胎児性抗原 (CEA) 値についての検討

朝日生命成人病研究所 消化器科  
○岩瀬 透, 吉次通泰, 佐々隆之

胃癌の進展度の診断に対して、CEA値はどの程度の意味を持ちうるかという点を中心に検討した。

**方法** 人間ドックですべての面が正常と判定した正常例67例(平均年齢48.8才)と、診断確定後ただちに手術にまわし、転移の有無と切除標本についての検査が出来た胃癌23例(平均年齢60.3才)(早期胃癌8例、進行胃癌15例)を対象とした。

CEA測定は、ダイナボット製のCEAリアキットによっておこなった。胃癌例では、外科手術にまわす直前に採血した試料についてCEAを測定した。

**成績と考案** 正常群のCEA値は、 $1.95 \pm 0.76$ 、最高 $4.0 \text{ ng/ml}$ で、男性 $2.04 \pm 0.75$ 、女性 $1.61 \pm 0.69 \text{ ng/ml}$ と男女間に有意差を認めなかった。男性群の平均 $\pm 3 \text{ SD}$ から、CEAの正常値の上限を $4.30 \text{ ng/ml}$ とした。年齢とCEA値の間に、正常群で一定の関係は認めなかった。以上の成績から、性別・年齢は考慮しないで胃癌のCEA値を検討した。

胃癌群のCEA値は、 $4.43 \pm 4.63 \text{ ng/ml}$ で、約1/4例が正常値の上限をこえていた。

胃癌の深達度との関係を見ると、PMより深いもの(進行癌)では40%でCEAは $4.4 \text{ ng/ml}$ 以上を示したが、M・SM群(早期癌)ではCEA値はすべて正常の範囲内( $4.3 \text{ ng/ml}$ 以下)にあり、平均値も $2.00 \pm 0.99 \text{ ng/ml}$ で正常群と有意差を認めなかった。CEAが正常値をこえていれば、早期癌ではないといえる。

胃癌の横への拡がり(大きさ)とCEA値との間には、胃癌群全体としてははっきりした相関を認めなかった。しかし深達度SMまでの早期癌だけに限定すると、正常値の範囲内でのことではあるが、癌の大きさとCEA値の間に良い相関( $r=0.93$ )を認めた。これは、CEA値が癌組織の量に大きく規定されていることを示している成績と考える。

胃癌の転移との関係を見ると、転移(-)群でCEAが異常値( $4.4 \text{ ng/ml}$ 以上)を示したものは1例だけであったが、転移(+)群では10例中5例でCEAが異常値を示した。この転移(+)群の転移は、主としてリンパ腺転移であり、すくなくとも肉眼的に肝転移などをきたしているものはなかったが、CEA値の上昇と転移の間に密接な関係があるといえる。CEA値からみると、胃癌で $4.4 \text{ ng/ml}$ 以上を呈した場合には、83.3%の高率に転移が存在した。

**結論** 1)、早期胃癌では、全例でCEAは正常値であった。2)、進行胃癌では、40%の症例でCEAは異常値を示した。3)、CEAが異常値を呈した場合、高率に転移が存在した。

#### 43 肝疾患とくに肝腫瘍におけるCEAの臨床的意義

広島大学 第一内科  
○中西敏夫, 竹野弘, 大林諒人, 国政徹明  
川上広育, 三好秋馬  
広島大学 放射線部  
山下征紀, 加藤良隆, 佐々木正博

**目的** 各種疾患、とくに肝疾患について血中CEAを測定し、CEAの有用性について検討した。

**対象および方法**、食道癌2例(肝転移1例)、胃癌21(13)例、膵癌13(6)例、大腸癌14(9)例、原発性肝癌40例、その他の癌16(12)例、急性肝炎12例、肝硬変13例を含む良性疾患47例および正常者40例の計193例である。肝癌(原発および転移)例ではAFP、CEAの同時測定ならびに $^{99m}\text{Tc}$ フチン酸または $^{198}\text{Au}$  colloidにて肝シンチを実施した。

CEAの測定には、sandwich法によるCEA-RIA kitを使用した。

**結果** 1) 正常CEA濃度は、 $0 \sim 2.5 \text{ ng/ml}$ とした。異常率は、正常例2.5%、良性疾患13.8%、食道癌5.0%、胃癌7.6%、膵癌7.5%、大腸癌7.8%、原発性肝癌3.5%、その他の癌8.1%であった。

2) 転移性肝癌例は、血中CEA高値を示し我々は、 $5 \text{ ng/ml}$ 以上を肝転移の基準と設定した。 $5 \text{ ng/ml}$ 以上を示す割合は、肝転移(+)例7.5%、肝転移(-)例2.3.1%であった。

3) 肝癌の原発性、転移性の鑑別に、血中CEA、AFPの同時測定は有用であった。原発性肝癌では、AFP高値、CEA低値、転移性肝癌では、CEA高値、AFP低値であった。

4) 転移性肝癌について肝シンチグラムと血中CEAの比較検討では、両者の診断率は、おのおの7.7%、7.1%であったが、肝シンチグラムで検出不能例の65.2%にCEA高値を認め、両者の併用でその診断率は、91.4%と上昇を認めた。

5) 血中CEAの経時的測定は、癌疾患における予後判定、手術、化学療法の良い指標となった。